

地域国際化と日韓お雇い外国人⁽¹⁾

—— T. E. N. ハリファックスの研究 ——

第1節 はじめに

周知のように、近年のわが国と諸外国との相互依存関係は、ますます広範かつ深化の過程を進みつつある。まさに、この状況はボーダーレス化の時代、国際化の時代と呼ぶに値するものである。そして、この傾向は21世紀に向かってますます加速するものと予測されよう。また、国際化の過程は、ヒト、カネ、物、情報などの多面的なチャンネルを通じて進展するが、これまでのような経済的局面のみならず、社会的、文化的局面にとっても新しい動向が生まれてくるであろう。

たとえば、ヒトの国際化について見れば、第1章でも見たように近年における日本人の海外旅行者と訪日外国人の急増傾向に如実に現れている。両者の年次別数を1964年から1988年までの24年間の推移で見ると、1964年には前者が12万8,000人で、後者は35万3,000人と、現在とは逆の状況であり、今日のように前者が後者を凌駕するのは1971年以降のことである。この年以降は、前者の増加率は加速化し、1988年には、前者は842万7,000人であり、後者は235万5,000人であった。しかし、この間、大半は観光を主目的にしているが、海外における日本企業の拡大に伴う業務上での日本人の海外旅行者の増大や、それとは反対に日本における外資系企業や、開発途上国からの外国人労働者の訪日も次第に比重を高めつつあることは明らかである。

日本人はこのような海外での経験と観察、さらに国内における外国人とのかかわりや、マスメディアを通しての多様な海外情報のシャワーによって、意識構造の変化が起こりつつあることも指摘できよう。しかし、その変化が幕末から明治にかけての文明開化の時代や第二次世界戦争の敗戦期におけるほどのものかどうか

かは、今後の動向いかんであろう。

さて、日本の国際化は、歴史的に見れば、少なくとも、幕末開国期以来のロングテーマと言っても過言ではないが、長期間にわたって、その国際化は先進西欧文明の一方的な輸入と受容の過程であった。したがって、国内の地域のなかでも、横浜、神戸、長崎、函館などのきわめて限られた国際化であり、ついで、東京、大阪などの大都市の国際化の進展であった。しかし、今日の国際化は上述したように、日本と諸外国との双方向の交流を基礎にしていることと、日本各地域において展開している点で、過去の国際化とは質的にも異なり、いわば地域国際化と呼ぶべき状況である。したがって、この地域国際化の問題は、それぞれの地域における構成主体である地方自治体、企業、市民などが、まちづくりの中心に置かなければならないテーマの1つである。

筆者は、これまで、地域国際化とまちづくりについて論じてきたが、今回は多少視点を変えて、明治の文明開化の時代に日本と朝鮮で活躍した1人のイギリス人の足跡を辿りながら、地域国際化の問題を考察してみたい。

今回の研究対象であるトーマス・エドワード・ニュー・ハリファックス (Thomas Edward New Hallifax, 1842～1908年) は、第6章でも多少述べたように、1871年(明治4年、以下、元号、一部省略する)に、電信技師のお雇い外国人の1人として来日した後、英語教師に転職し、1883年まで、東京の数校の学校や塾で教鞭を取っていた。その後、渡韓し、1883年から1889年頃まで、同国政府の最初の官立英語学校の英語教師を約1年した後、再び電信技師として京城・釜山間の電信工事に従事した。彼は、その功によって、1888年には韓国政府から通政太夫の称号を授与された。しかし、この電信工事の成功の背後には、日本政府の強力な外圧があったことも見逃せない歴史的事実である。

1890年(明治23年)、再び彼の足跡は日本に刻まれることになる。同年4月、福島県尋常中学校(現、福島県安積高校)の英語教師として教壇に立つのである。写真9-1は当時の俵を伝えるものである。当初の契約期間の1年間はすぐ去ったが、彼の優れた学識や指導力、人柄や熱心さによって契約は更新され、3年目の春を迎えたが、その頃から県議会の意向は彼の高給を理由に、外人教師から日本人教師の採用に傾いた。その結果、1893年(明治26年)春、彼や生徒たちの意に反して、福島県を去るのである。

写真 9-1 福島県尋常中学校第4回卒業生とハリファックス
(前から2列, 左から4人目)



出所) 安積高等学校百年史編纂委員会編『安中安高百年史』1984年, 10頁。

この中学在任中での出来事のうちでは、なんと言っても、当時、当中学に在学していた、1人の青年であり、後のエール大学教授、朝河貫一博士との運命的出会いが重要であろう。朝河がハリファックスの解雇を思い止まらすために県議会に建白書を提出したことは有名であるが、このことから見ても、ハリファックスは優れた資質をもつ指導者であったことが窺える。

福島県を去った後の彼の足跡は、多くの地元の人々の探索にもかかわらず、霧に包まれていた。筆者は、1987年11月、ハリファックス探索者の代表者の1人であった同校校友会会長、故岡部文侯氏から、はじめてハリファックスについての話を聞く機会を得た⁽²⁾。それ以来、筆者もまた、地域国際化のパイオニアの1人とも言えるべきこの人物の生涯に関心を持った。彼の探索はきわめて困難が伴ったが、多数の方々のご支援によって、かなり明らかになってきた。すでに、彼の生涯についての概略は発表した⁽³⁾が、今回、それらの発表後、明らかになった点をも含めて述べることにしたい。

なお、福島県を去った後の彼の人生の後半は、長野県尋常中学校(現県立松本深志高等学校)を経て⁽³⁾、再び、朝鮮国官立英語学校英語教師として人材育成に専

心し、1908年、異国の地、ソウルで波瀾に満ちた生涯を終わり、1897年9月6日、18歳で早逝した娘アグネス・フローレンス・ハリファックスとともに、ソウル外人墓地に永眠した。享年66歳であった⁽⁴⁾。また、彼の日本人妻については娘の死亡届にも記載なく、出生届は未発見のためまったく現在のところ知る手掛かりがない⁽⁵⁾。

第2節 お雇い外国人ハリファックスの来日

(1) 来日前の経歴

トーマス・エドワード・ニュー・ハリファックスは、1842年、ウィルトシャー・ウェストバリーで生まれた。父はトーマス・エドワード・ハリファックス、母はエミリー・ハリファックス・モーガンであった。その後、どのような家庭環境のなかで、少年時代を送ったかは、まったく不詳であるが、生出時における父親の職業はスクール・マスターであった。その後、父親が彼の修業したロンドンのセント・メアリス・カレッジ (St. Mary's College) の教授であったことから推定して、かなりハイクラスの生活は保障されていたものと思われる。このカレッジは、ローマン・カソリック教員養成のカレッジであり、1850年にロンドンのハマスミス (Hammersmith) 区内のブルック・グリーン (Brook Green) に開校した。当地区は、ローマン・カソリックに関連する建物が、教会をはじめとしていくつか建てられていた。しかし、1925年、当カレッジは現在地であるロンドン近郊のツビッケンハムのストローベリー・ヒル (Strawberry Hill, Twickenham, Middlesex) に移転した。

彼の経歴に関する残されている記録文書は、現在のところ次の2つが見つまっている。1つは、福島県に残る文書で、日本語の履歴書である⁽⁶⁾ (以下、福島文書と呼ぶ)。これは恐らく、彼が提出した英文の履歴書を要約して翻訳したものであり、英文はなお未発見である。筆者の調査では、この履歴書はいくつか不正確な点を含むものである。他の1つは長野県に残る文書であり、ハンドライティングの英文の履歴書である⁽⁷⁾ (以下、長野文書と呼ぶ)。しかし、この英文履歴書も日本人に読みやすくするために日本人によって浄書されたものと推定できる。これには、次のような文章が書き加えられている。

すなわち、A. S. I was born at Westbury, in Wiltshire, in 1843. Full name is Thomas, Edward Hallifax, これは字体からみてまずハリファックス自身の真筆に間違いのないであろう。この Hallifax の文字と英文履歴書の最後に署名してある Hallifax の自筆は一致しているので、まず、以上の2つの文書の成立過程についての推察は正しいと思う。

両履歴書のうち、来日前の経歴については、福島文書はわずかに学歴について述べているにすぎないので、以下では、長野文書に基づいて述べたい。

まず、彼は上述した点だが、次のように述べる「私はロンドン近郊のセント・メアリズ・カレッジで、当校創立の教授の1人であった父の監督のもとで主に教育をうけた」と。この点で福島文書は8年間と記しているが、長野文書には記載されていない。ついで、「およそ15歳の頃、私はイートン・カレッジ (Eton College) に行き、そこで2カ年留まった (remained)」と記している。この年齢からみると、彼が在学していたのはセント・メアリズ・カレッジの付属小・中学校と判断できる。この点で福島文書には15歳の年齢記載はない。さて、つづいて、次のような職歴について述べる。「この後、私は電信サービスに入社したが、当時、当社は会社管理であり、この状況は、電信会社のすべてのラインが政府郵政部門によって買収された1870年まで続いた。1862年、20歳の年にサルホードでアミ・マリマ・ブラッケリー (20歳) と結婚した。

イギリス政府から年金 (pension とあるが退職金であろう一筆者) を受領した後、イギリスを離れ、英国電信ケーブル会社の仕事で西インド諸島に赴任した。

キューバに1年間滞在した後、日本政府の電信事業の指導監督者として日本へ向かった (1871年)」と記している。以上のとおりとすると、上記のセント・メアリズ・カレッジで学び、その後1869年まで英国電信会社で仕事し、1870年キューバに向かい1871年日本に来日となる。彼の学生時代やイギリスでの電信会社時代の状況を伝えるものは未発見であるが、キューバでの見聞については、後年、福島尋常中学校友会誌『扶桑の花』に掲載したエッセイが当時の状況を伝えている。この点はすでに紹介したのでここでは省略する⁽⁸⁾。

(2) 電信技師として来日

ハリファックスが来日した正確な日付は不詳であるが、上記履歴書および通信

総合博物館に残る資料によると1871年5月16日に当時の電信寮に雇用されているので、この時点からあまり遡ることはないと推定されよう。この年（明治4年、辛未）および翌年（明治5年、壬申）にかけて、電信寮は多数の電信関係のお雇い外国人を雇用した（表9-1）。

この資料によると、セーフル以外はすべて英国人であり、当時の電信はイギリスの技術に依存していたことがわかる。表9-2は1872年（明治5年）における工部省内のイギリス人とフランス人の部門別総数であるが、これによっても、イギリス人は鉄道・灯台・通信を分担し、フランス人は造船・製作を分担していることがわかる。

わが国には、すでに1869年（明治2年）8月、イギリス人ジョルジ・ギルベルト（George Miles Gilbert）が、電信お雇い外国人第1号として来日した。彼は、まず

表9-1 電信寮お雇い外人

人 名	学 科	本 国	月給	雇 用 期 間（明治）
ジョルジ	建 築 長	イギリス	375ドル	4年6月29日～7年8月14日(3年)
セーフル	電気製造方	プロシア	250	5年1月14日～8年2月21日(3年)
ハスウエル	電 信 長	イギリス	250	4年10月19日～5年10月30日(1年)
ヘンドリー	電信機械長	"	225	"
ストーン	書 記 官	"	200	5年2月19日～8年3月26日(3年)
ホストル	建 築 補 助	"	150	4年7月14日～7年8月28日(3年)
ハリファエックス	"	"	150	4年5月16日～7年7月2日(3年)
チール	"	"	150	"
モリス	"	"	150	4年6月9日～7年7月25日(3年)
ラルキン	"	"	150	4年6月17日～7年8月2日(3年)
フライ	"	"	150	"
ウエテ	電気取扱方	"	120	5年1月22日～8年2月27日(3年)

注) ハスウエル、ヘンドリーは5年11月1日～6年10月30日まで再雇用された。ハリファエックスはハリファエックスと記せられている。

出所) 逓信総合博物館資料。

表9-2 工部省内のイギリス人とフランス人

寮 名	工学	鉱山	鉄道	灯台	電信	造船	製鉄	製作	測量司	計
イギリス人	2名	3	52	33	10	—	—	—	—	104
フランス人	—	1	—	—	—	24	2	6	4	33

出所) 梅溪昇『お雇い外国人①概説』鹿島研究所出版会、1968年、70頁。

横浜の外国官（後の外務省）と裁判所（現在の県庁）の間に電信線を架設した⁽⁹⁾。表9-1の建築長ジョルジは、この人物ではなく別人エドガー・ジョージ（Edgar George）のことであり、1871年7月、電信建築長として東京・長崎間の電信工事を総括していた。この工事には電信寮官員20名が従事したとされている⁽¹⁰⁾。そのなかにハリファックス（ハリフエックス）が参加していたことは、まず間違いないことであろう。

日本人にとってハリファックスのかな表記は、たいへん難しかったと見えて、上述の博物館資料にも、トーマス・エドワード・ハリファツキス、ハリフエツキスの記録が残されている。太政類典のお雇い外国人のなかでは、ハリフエックスと記録され、原綴はHalifaxとなっているが、Hallifaxの誤りである⁽¹¹⁾。1872年9月に入ると、エドガー・ジョージおよびウォルター・チールらは、東京・青森線建設にも着工したから⁽¹²⁾、その工事にもハリファックスは従事していたかもしれない。日本における電信技師としての役割は、電信寮との雇用契約が満期になる1874年（明治7年）7月2日をもって完了するのである。

第3節 東京生活の足跡

（1）英語教師への変身

電信寮での3カ年に及ぶ日本での生活を通じて、ハリファックスは日本についてのいろいろな知識を身につけたに違いない。電信寮では日本人との接触もあり、日本語についても日常生活を足せる程度に上達していたであろう。満期終了後、帰国すべきか、日本に留まるべきか。彼は人生の重大な選択をしなければならなかった。この点に関して、上記英文履歴書は次のような重要な記載を残している。すなわち「……私は、1874年まで、その仕事に従事した。その年、私はある私的な問題を処理するためにイギリスに行ったが、再びこの年に日本に帰ってきた」と記している。

しかし、どのような私的な問題であったかは不明である。当時の旅行日数と費用をかけてまでして日本とイギリスの間を往復したほどの理由とはなんであったか。今は不明である。さらにつづけて次のように述べている。「この年（1874年―筆者）から、1883年4月（明治16年）まで、（カリフォルニアで過ごした18カ月間

を除いて)東京の諸学校で英語教育に従事した」と記している。この諸学校については記載がないが、幸い福島文書にはこの諸学校として、同人社(2カ年)、芝新銭座近藤塾(3カ年)、成立学舎(18カ月)、共貫義塾(3カ年)と記載されている。しかし、¹³⁾彼について残されている資料から見ると、この順序で雇われ、記載された年月が正確であったかは疑問であるが、おおよそは事実に近いものであろう。以下では、残されている記録で明確なものについてのみ述べることにする。

電信寮との満期雇止である1874年7月2日に連動するものではなく、もっともその年に近い日付は、1876年12月24日付けの成立学舎(東京、丸山光成経営)との英語教師契約である¹⁴⁾。この時の彼の住所は第4大区2小区今川小路2丁目17番地であり、成立学舎内であった。俸給は生徒1名に付、金75銭の謝礼金をもって給料とするものであった。彼の年齢は32歳と記されているが¹⁵⁾、実際は34歳であった。この成立学舎には、まず3カ月の契約を行い、1877年3月23日に満期となるが、雇用継続し、同年11月22日まで勤務する。その後、多少の空白期間があるが、1879年9月15日から1880年2月まで数カ所の英語学校に勤務しているが、それは先にも述べた同人社、共貫義塾などである。住所も築地小田原町3丁目10番地高島清右衛門方や居留地に移転している。また、俸給は月給18円、ただし31名以上に至る時は1名に付き75銭、また月給40円、さらに生徒1名に付き1円と学校によってさまざまであった¹⁶⁾。

1880年(明治13年)2月以降のハリファックスについての記録は、その後、数カ月間空白になるが、1881年6月7日付けで攻玉社英語教師として記録されている¹⁷⁾。彼の履歴書では「芝新銭座近藤塾ニ於テ3ケ年」と記せられている点に符合するのである。この塾は1863年(文久3年)に幕府軍艦操練所翻訳方近藤真琴によって開かれたものである。その後、1871年(明治4年)慶應義塾が新銭座から三田に移転した跡を買収して塾舎とした。すでにこの時は攻玉塾と呼ばれていたが、近藤塾とも呼ばれていたのであろう¹⁸⁾。そして、1972年の学制によって攻玉社となった。ハリファックスが教壇に立った翌年の1882年(明治15年)、攻玉社に入学した小笠原長生は、当時を回顧して次のように書き残している。すなわち、「前略 英語は初めはファリファックス先生——英人——が教えてくれ、辞められてから、近藤先生の周旋で兵学校助教ハモンド先生——英人——、砲術準士官——が来られた。後略¹⁹⁾」と。ハリファックスが教壇を去った正確な日付は

表9-3 攻玉社英文読書部の学年別授業内容

学期	第1年	第2年	第3年	第4年	第4年半
6ヵ月	「英語綴」 ウイルソン第 2リードル	クエッケンボス 「米国史」 スエル 「羅馬史」	グードリッチ 「仏国史」 ガノー 「窮理書」	テーロル 「万国史」	マコーレー 「ヘスチング伝」 ウエーランド 「経済書」
6ヵ月	バーリー 「万国史」 ガヨット 「地理書」	マルカム 「英国史」 ピネヲ 「大文典」	チャムバ 「近世史」	ソーシー 「ネルソン伝」 マコーレー 「クライブ伝」	

出所) 攻玉社学園編『攻玉社120年史』1983年、35頁。

不詳であるが、1883年（明治16年）8月には渡韓するので、同年3月の公算が高い。

当時、攻玉社の授業内容は1886年9月の攻玉社開申書によって知ることができる⁽¹⁹⁾。それによると、学科は数学部、英文読書部、和漢文学部からなり、毎週それぞれの学科を12時間ずつ計36時間の授業が実施された。さらに1年から4年半までの授業内容が定められていた。ここでは、彼が携わった英文読書部の学年別授業内容について紹介したい（表9-3）。

これからも明らかなように、途上国日本がいかに先進欧米諸国の歴史・地理の学習に重点を置いていたかがわかる。また、攻玉社はとくにいわゆる正則英語の教授のために1873年（明治6年）以来、外国人教師を継続的に雇用していた。これらの外国人教師の多くは、在日中、海軍兵学校・慶應義塾・商法講習所（現、一橋大）などで教授していた著名人であった⁽²⁰⁾。英語教師に転身して7年の実績を積んだハリファックスは英語教育界のなかで次第に知られる存在となっていくものと推測できる。

（2）日本女性との婚約と破談

1874年（明治7年）7月、ハリファックスは電信技師を辞めてから英語教師として活躍することについては上述したとおりである。そして、英語教師も板についた1879年（明治12年）も押し迫った12月4日、1人の日本女性から彼との「外国人結婚願」が東京府知事宛に申請された⁽²¹⁾。当願書によると、日本女性の氏名は井出すずと言ひ、故井出新平の長女である。当願書はすずの叔母に当たる井出

ふさ名義で申請された。また、すずの後見人として、ふさの実母井出せい（麹町区6番町17番地三井正婦方）、申請者井出ふさ、すずの叔父に当たる三井正婦の3名が連署している。すずについては以上のほか、まったく不詳である。またハリファックスとすずはどのようにして知り合ったかもわからない。当時、お雇い外人が日本女性と結婚したケースはいくつも見られる。上述したアーネスト・サトウも内妻ではあるが、日本女性と結婚した一人である。その外、ジュ・ブスケ、ベルツ、ミルンなどの名が挙げられる⁽²²⁾。

この願出を受理した行政機関は、ただちに英国領事館に手続きを進めたが、翌年の1880年（明治13年）1月15日付けの貌列顛国代弁領事マーチン・ドーメンから東京府知事松田道之宛への回答は次のようなものであった。

「……英国人ハリファキ氏日本人イデ、スミト結婚之儀ニ付キ当領事廳へ願出候哉之旨御問合委曲了様致シ候就テハ同氏ヨリ右ニ付キ当廳へ願書差出有之候ヘモ同氏結婚ニツキ少々困難之件有之依テ右落着致シ候迄ハ当廳於テ結婚認可可難相成儀有之依テハ右件事済次第猶拙者ヨリ御照会可申上候依テ此段貴答迄如斬御候敬具」（訳、岩見鑑造、傍点筆者）。まず、回答文にある「少々困難之件有之」とは何を意味するのであろうか。明らかに、ハリファックスの側の障害要因である。彼自身、婚約決意の段階でこのような状況を予想できなかったことであろう。法律的に結婚成立要件に抵触する事柄であり、一定期間の後、解消されることが明瞭な事柄なのである。現段階では、これ以上、この点について明らかにすることはできないが、有力な理由としてはイギリスに残した正妻と正式離婚していなかったものと推定できる。

さて、その後、この婚約話はなかなか進展せず、ついに、1882年（明治15年）6月6日付けで、上記結婚願に対する戻願が申請されることになり、破談となる。当件については、これ以上の詳しい資料は残されていないが、おそらく当事者の間では、かなり深刻な話が展開したものと推定される。後にハリファックスは福島県尋常中学校教師として赴任するのであるが、その時は日本人妻と1人娘アグネス・フローレンスを伴っていた。そして、この娘の誕生年は、不思議なことに婚約話の持ち上がった1879年なのである。そうすると、井出すずとの婚約話は不成立に終わったが、彼の日本人妻は井出すずであったかもしれない。しかし、残念ながらそれを確認する資料はいまだ見出せない⁽²³⁾。

第4節 韓国政府お雇い外国人として活躍

(1) 同文学英語教師

先にも述べたように、ハリファックスが東京の攻玉社を退職した正確な日時は不明であるが、恐らく、1883年（明治16年）春であろう。そして、その年の8月、明治4年以来の日本での生活に別れを告げ朝鮮半島に向かうのである⁽²⁴⁾。それは、朝鮮政府通商衙門の付属英語学校（北京の同文館に倣って、同文学と呼んだ）の設立に伴う英語教育の責任者として招聘されたことによるのである。この英語学校は朝鮮政府の国際化政策に不可欠な人材養成を意図したものであった。そして、この学校の設立に当たっては、1882年に朝鮮政府の外交顧問として招聘されたドイツ人メレンドルフ（P. G. von Möllendorf, 朝鮮名^{はくりんとく}穆麟徳）が中心的役割を果たした⁽²⁵⁾。このような経緯をへて、同文学は1883年8月、まず中国人教師、呉仲賢と唐紹威が着任し、2カ月後の10月1日にハリファックスと中国人教師、同が着任した⁽²⁶⁾。当初の学生は約40人であった⁽²⁷⁾。恐らく、ハリファックスの人選には、ソウルの英国領事館と日本の英国公使館がかかわっていたものと思われる。

ハリファックスは同文学での英語教育について、後年、次のような回顧談を残している。

「……当時税関局も設立せられたるを以て、余は或る学生に英語を教へ、該局官吏になさんと勉めたり。之れ朝鮮国に於ける英語学校設立の始めなりとす。其の目的は各開港場に於ける税関局に通弁人を供給せんとするにあり。此通弁人なる者は当時朝鮮にて、非常に欠乏を来し居りしを以て、余は非常に勉強し之を完成せしめんと欲したり。遂に十八ヶ月を経て、余の或る生徒をば開港場に遣はす事とはなりにけり。然しながら其の退校する事少し早やかりき。其の遣す生徒の選択をば余に任せられたれば、余は却て其の未熟の者を選びて該所に遣はし、其能く熟練して未頼母敷者には尚ほ少し教えて最良完みの者を出さんと勉めたり、爾后六ヶ月を経て、其善生徒の数人が各外国公使館、又は内外両務省等の通弁人として本校を去ることとなりぬ。就中英語に能く習熟せる二三の生徒は、其言語の抑揚と言ひ音調と言ひ恰も英人の如く完みたり⁽²⁸⁾」と。

同文学開校の翌年、すなわち、1884年2月21日の「漢城旬報」（1883年10月1日

創刊、官報）第15号によると、昨年7月、生徒を募集し現在、29人が学び、奚来百土（ハリファックスの朝鮮名）が教授し、彼は日語にも通じていること。成績優秀者には食費一切を支給、生徒は紙・筆・墨は自弁し、本・西洋製紙は学校が支給すること。授業は午前・午後行い、生徒の学力は進捗し、ここで学んだ後、各所で活躍し始めていることを伝えている⁽²⁹⁾。

ハリファックスを中心とする同文学の英語教育は、順調に進むように見えたが、1884年末から1885年にかけて、朝鮮政府による教育近代化政策は新しい段階に入っていた。政府は、本格的な近代教育機関の設立を図り、1885年6月アメリカ政府に対して、そのための教師派遣を要請した。その結果、1886年7月4日、アメリカから3人の教師、すなわち、ハルバート、バンカー、ギルモアが着任し、同年の9月23日、育英公院が開校した⁽³⁰⁾。同文学は、このような動向の中で、同年8月13日、廃止され、ハリファックスは解雇された。この間の状況をハリファックス自身も、先の引用文に続けて次のように述べる。

「……余は斬の如くして、殆ど一年半〔実際には、1883年10月～1886年8月－筆者〕英語を教授したりき時に、米国の伝教師来り、奸計を廻らし賄賂を行ひ遂に、余の生徒を奪ひ去りたり。当時生徒は僅かに四十五人なれば一人の教師にて之を教えるに充分なり。然るに朝鮮政府は愚かにも、余と同じ俸給を以て之が教師として米国伝教師三人を雇ひ入れたり⁽³¹⁾」と記している。多分に彼の被害者意識が強調されているが、彼が韓国の教育近代化の被害者であったことも事実である。

ギルモアは、この点について、次のように書き残している。

「……3人の教師達が朝鮮に着任した時、彼らは、ハリファックス氏によって指導されていた通訳養成学校の存在を知った。彼は、学者ではないが、自力で習得した学識にたいして、高い称賛を受けていた。かれは、英国人であり、船乗りであったとも言われている〔下線を論証する資料は現在、未発見である－金田〕。かれは電信技術を学び電信業務の職をえるために朝鮮に来た〔下線は事実と反する、本文参照－金田〕。この業務が期待に反したので、彼は通訳養成学校の開校を達成し、彼が持った機会を考慮して、大変よく仕事をした。われわれは、この学校が継続することを望んだが、予想したごとく、そうはならなかった。ことによると、公使館、外務省、その他の部門での通訳に対する需要を通じて、われわれの最も優秀な生徒たちを失わねばならなかった。通訳は、ひとりにとっては、そう

とうまとまった額である月25ドルから100ドルを握れたので、このような身分が差し出す誘いは、われわれのところから優秀な生徒たちを減らすことになった。ハリファックス氏は、それにもかかわらず、上述したように、[3人の]教師たちを非難したが、このようなことは、われわれの望みに反することであった。……⁽³²⁾」。

(2) 朝鮮政府電信工事監督

意に反して、同文学英語教師の職を解かれたハリファックスに対して、2カ月後、彼の日本における電信技師の経歴を評価した朝鮮政府は、彼を再び電信工事監督に任命した。当時の朝鮮半島における電信工事は、日本に比べてかなり遅れていたが、1883年（明治16年）に日本政府の免許状を持ったデンマーク国大北部電信工事によって釜山・長崎間の海底電線工事の着工（翌年2月開通）により、急速に進捗した。さらに、1885年11月には京城・仁川および京城・義州間の電信線が架設された⁽³³⁾。当時、日本政府は主に軍事目的から京城・釜山間の電信架設権を朝鮮政府に要求し、同年11月、韓日海底電線設置条約によって京城・釜山間南路電線の架設を約定した。その結果、翌年の1886年10月から同電線の架設工事着工になった。このような事情下にあった朝鮮政府にとり、まさに、ハリファックスの活用は願ってもないことであった。

着工2年目の1888年2月にはイギリス人パークスが来韓し、5月には日本の電信局雇いシュレステルが来韓し同事業を支援した。かようにして、7月9日無事に京城・釜山間南路電線は開通した。ハリファックスはこの事業の監督の任に当たったが、後年、この工事は将来、柱朽ち、器械破壊しても朝鮮の資金難から修復が難しいことを指摘した⁽³⁴⁾。彼のこの指摘は的中し、1914年（大正3年）刊行の朝鮮総督府通信局によって次のように言及された。すなわち、「……其ノ工事ハ拙劣幼稚ヲ極メタルヲ以テ一朝風水ノ災ニ遭遇セバ不通障碍ノ頻繁ナルハ勿論全線通信杜絶ニ帰スルカ如キハ決シテ珍シカラズ……中略……明治二十七八年日清戦役ノ際京城釜山間ニ於ケル旧韓国政府電線ノ各所朽敗破損シ到底其ノ用ニ堪エサルヲ以テ帝国政府ニ於テ京城釜山間京城仁川間ニ軍用電線ヲ架設シ……」⁽³⁵⁾と。

結果的には、ハリファックスらの努力した南路電線は短命であったが、彼はその功により、「朝鮮国正三品通政太夫」の称号を授与された。彼は、この事業を

終え1890年初めの頃に、再び日本に戻り英語教師として郡山に赴任することになる。その時に作成された日本文履歴書には既婚と記載されている。彼が日本人妻といつどこで結婚したかは不明であるが、妻が先述の井出すゝ以外の女性であるとするれば、渡海直前かこの在韓中の公算が高い。

以上の韓国における経歴について、前述の英文履歴書は次のように述べている。「1883年8月、私は、当時、ソウルに創設されたロイヤル・コーリャン・カレッジ (Royal Corean College, 上述の同文学のことである一筆者) の英語教師に任命された。私は、この仕事に4年近く従事したが、ソウルのアメリカの伝道師たちが画策して、アメリカから3人の伝道師たちを連れてくることに成功し、私の学校の教師におさまってしまうまで続いた。彼らの着任で、私の仕事は不要になってしまい、政府は私に解雇の補償金1,000ドルを支払った。1888年朝鮮政府は、朝鮮電信学校で英語を教えるためにわたしを再雇傭した。しかし、数カ月間、数えた後、私をソウルから釜山への電信線建設のために内陸部に派遣した。この〔工事〕が完成した時、帝、すなわちキングは、勲章とともに、正三品の称号を授与した。最終的に、すべて、お雇い外国人の場合のように、私の給与は支払いが滞り、12カ月間支払いなしで待機させた後、政府は私を、私に支払わねばならない給与の1部のみを支払って解雇した。私はそれゆえ、900ドルの未払い分を残して朝鮮での仕事を離れ、日本へ来た (1890年)」と記している。

(3) 王立アジア協会のシナ部会会員

ハリファックスが亜細亜協会会員であったことは、福島県に残るハリファックス関係文書の中に「1890年2月10日、亜細亜協会支那部会員チー・イー・ハリハクス」から当時の文部次官辻新二宛の氏の略歴文から明らかである。ただし、英文原稿はなく、日本人による邦訳文である。この亜細亜協会支那部会員について、前掲論文 (注1)) では、この協会が日本の政府議員によって組織された亜細亜協会を指すものと推定していたが、その後の調査により、この協会はロンドンにおいて Sir George Thomas Staunton (1781-1859) らによって1820年代に組織された王立アジア協会のシナ部会 (The China Branch of the Royal Asiatic Society—創設年不詳) のことであり、1859年から上海において *Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society* (なお、当誌は North-China Branch 名が用いられる場合もある) を

発刊していた。

ハリファックスが当協会に参加した詳しい経緯は不詳であるが、当誌の1889年(23巻)の会員リストに初めて正会員として記載され、住所はソウル、選出年(Year of Election) 1889年と記録されている。氏の関連文書は当誌の1989~1990年(24巻)において、2カ所に記載されている。以下、この点について紹介しておきたい。

その1つは H. B. Morse の“Abstract of Information on Currency and Measures in China”「中国における通貨および度量衡についての情報」と題する論文において、ハリファックスはソウルでの現地情報の提供者の1人として、次のような情報を提供している。

「現地の人々の間の唯一の通貨は銅貨であり、この平価はメキシコおよび日本ドルで、毎日ドル当たり1,200から2,000までに変動する。ハイクラスの貿易商の間では、日本の銀ドルが喜ばれる。他方、シナの山師たちを経てきた贗メキシコ人とともに、かなり持ち込まれて来たので、メキシコドルはかなり疑いをもって見られ、きらわれている。そこで、それはしばしば通用を難しくする。シナの紋銀もまた朝鮮で通用しているが、通貨価値の変動のために正確な交換比率を話すことは難しい。最近年、日銀紙幣や政府紙幣は、ソウルや港のみではあるが、ハイクラスの朝鮮商人の間で人気がある。しばらく以前、朝鮮造幣局は少量の朝鮮銀ドルの鑄造に成功したが、これらの最初の見本(数千)は宮廷に、おそらく、王妃たちの装飾品のために向かってしまったので、鑄造は取り止めてしまった。そんな訳で、現在、われわれは、朝鮮での唯一の現地硬貨として共通の現金〔銅貨〕と外国の媒介として、日本銀ドルと紙幣を持っている。現在、メキシコドルはほとんど見られない。8あるいは10年以前、朝鮮政府は3つの貨幣単位をもつ限られた量の純粋の銀貨を鑄造した。この3つの硬貨のセットされた本来の価値は1.10ドル(\$)であった。しかし、これらは1883年と1884年にほとんど日銀に購入され、大阪に送られて再鑄造された。わずかに残っているものは、珍品として個人で携えられている⁽³⁶⁾」。

その2は彼自身の「日本における男女の顕著な長寿について」と題する次の文章である。

「1890年3月に公刊されたセンサスレポートから得られた添えられている表は、

表 9 - 4

年齢	男	女
70歳	—	983,856人
80	—	199,074
90	—	7,507
101	9人	21
102	0	9
103	1	2
104	4	18
105	3	6
106	1	1
107	0	1

日本における男性の長寿よりかなり女性の長寿が多いこと、また日本人がタバコと木炭の煙を吸引しても害を受けないことを示すものとしていささかの関心を持つものかも知れない。日本の家屋では、秋、冬、春の間、木炭の火で部屋を暖めるのはどこでも行われていることである。家屋は四方からの通風を許すように粗悪に造られ、煙を比較的無害にするので、煙自身がたいへん有害である証はない。しかし、人々は男も女も、すぐヨーロッパ人を驚かすような程度まで、煙を吸うように頭をかがめて火に近づいて座る習慣を持っている。さらに、男女とも常習的なスモーカーであり、煙草の煙をすべて吸っている。もちろん、多くのヨーロッパ人も煙草の煙を吸うが、彼らは木炭の煙を吸うことはない。彼らが、人生の大部分を有害物質を吸い、それゆえ、その同じ割合で酸素の必要供給を減少させているように見えるけれども、少しの日本人は100歳までに達しているのは、むしろ驚くべきことである。わたし自身の知り合いの間でも70歳より80歳近い数人の老女たちは、常習的なスモーカーであり、歳の4分の3は木炭の火にかがんでいるが、まだきわめて健康かつ活動しているのである³⁷⁾。

第5節 福島県尋常中学校英語教師時代

(1) ハリファックスの招聘

福島県尋常中学校は1886年（明治19年）12月の旧校舎（福島）の焼失後、転々と居留状態を余儀なくされていたが、1889年（明治22年）3月、桑野村（現、郡山市

開成)の新天地に全校舎の竣工を迎えることができた。これは、安積の強力な誘致によるものであった。村民はその堂々とした白亜の校舎を「おらが桑野御殿」と呼んで郷土の誇りとした⁽³⁸⁾。また、この新校舎は、新時代の人材育成にふさわしい学園であった。時の校長和田豊氏はとくに外人教師による英語教育の実現を計り、県知事山田信道の命をうけて、この人事の斡旋を文部省に依頼した。その結果、文部省は先に述べたように、多年、日本人に英語を教え、朝鮮での電信事業でも功をなしたハリファックスを和田校長に推薦した。明治23年2月14日、校長は文部省に出張し、氏に面談した結果、「学位等ハ無ケレトモ教育モアリ尋常中学校教師トシテ不足ナキヲ確ム」と県庁に伝えてきている。その結果、同月23日、校長と氏は正式雇傭約定書を取り交わした⁽³⁹⁾。

この約定書は全11条からなり、かなり細部に渡るものであった。以下、その要点のみを紹介しておきたい⁽⁴⁰⁾。

- 第1条 和田豊はハリファックスを英語教師として雇用する。
- 第2条 雇用期間を定め、明治23年4月1日より明治24年3月31日まで満1年とする。
- 第3条 雇用中の給料は1カ月金120円、家屋料として別に1カ月金10円とする。
- 第4条 授業時間は指定休業日以外、毎日4時間以内とするが、作文添削および試験答案取締等の教授上の義務に属する時間はこれ以外とする。
- 第5条 病気により職務不可能な際の事前届出と1週間以上の際の医師診断書の届出を義務とする。
- 第6条 病気により30日以上職務不可能な際に自費により代人を立てることができなければ、31日より不勤日数に応じて給料を差引くこと。もし、2カ月以上経ても治らない際は、この契約を解約できること。
- 第7条 一方の都合による約定の解除は、希望する方が2カ月以前に他の一方に通知すること。校長の都合の場合には学校は、解約翌日から2カ月分の給料を支払い、ハリファックスの都合の場合には学校は、解約翌日から給料を支払わないこと。
- 第8条 学校規則に反し、あるいは校長の指揮に背いた際は、いつでもこの契約を解約できること。

第9条 満期による解約はもちろん第6条、第7条、第8条その他の事故による解約の際には帰国旅費は支給しない。しかし、赴任の際には、東京から学校所在地までの旅費として金50円を支給すること。

第10条 約定満期後、なお、学校側が雇継を望む場合には、2カ月前に通知し、双方協議して約定を結ぶこと。また、雇継をしない場合にも2カ月前に通知すること。

第11条 期間中、もし、現校長退職の際は後任校長がこの約定を履行すること。

ハリファックスが文部省の斡旋を受けたことについて、村上友彦（福島県歴史資料館研究員）は、「ハリファックス氏も京城官立学校で教員をしたことなどから、垂細垂協会に加わり、政府役人との交流を深めたことが推察できる⁽⁴¹⁾」と推論している。

さて、当時の尋常中学校が外人教師の招聘を必要とした背景については、『安中安高百年史』において、「外人英語教師ハリファックス」と題して次のように記載している⁽⁴²⁾。多少長くなるが、当時の中学校での英語教育の一端を知るうえで全文を引用する。

「ハリファックスを迎える 明治23年（1890）4月1日、本校では英語教師として、英国人トーマス・エドワード・ハリファックス（英国ロンドン府、セント・メリー学校修了）を迎え入れた。月給120円、時の校長給の2倍より多きこと5円と言う破格の待遇であった。当時の教員俸給の平均月額は34円60銭ほどであったから、4人分近くの待遇であった。それに公舎を新築して住ませたのであった。右のように外人英語教師を迎え入れた背景としては英語尊重の教育方針である。当時の文明開化期における中学校として最も重要視された学科は言うまでもなく英語であった。この教育方針は明治18年（1885）12月に成立した伊藤第1次内閣の文相として就任した森有礼のたてたものであって、翌19年（1886）4月に発布された小学校令に基き定められた「学科及其程度」を見ると、高等小学校第1学年（当時の小学校修了年限は、尋常、高等各々4カ年であった）より、土地の状況によって英語を1週3時間あて課する規定であり、また、明治19年6月省令第14号を以て「中学校令」第7条に基き「尋常中学校ノ学科及其程度」定められたが、それによると、英語を第1外国語とし、第1、2年級が1週6時、第3年級

が1週7時、第4、5年級が1週5時限を課し、更に第2外国語として、独語か仏語を、もしくは農業を第4年級に1週4時限を、第5年級に3時限を課する規定であって、所謂欧化主義政策の高調された時代であるから、外国語重視の風潮は独り小中学校のみには止らなかった。

受験に英語重視 高等中学校（後の旧制高等学校）に入学する際にも、勿論語学が重要視されていた。当時、仙台の第二高等中学校（後の旧制第二高等学校）には、毎年、本校よりの入学希望者が多く、尚受験に際し、最も困難を感じていたのは、外人教師の行う英語の書取りテストであったので、ここに外人教師による語学指導の必要性を痛感したことになる。

前述のように外人教師の待遇もよかったが、その受持時間数も多く、各学年にわたり、全クラスの英語購読、英会話、英作文、英語の書き取りの時間を担当し、全校生徒残らず教授していた。その為に生徒の語学力は長足の進歩を見るに至り、上級学校への進学者数も倍増するようになったのである」。

（2）安積生活の足跡

ハリファックスを迎えるにあたり、福島県は先に紹介したように、たいへんな厚遇であったが、さらに、氏のために中学校敷地内に和洋折衷式の住宅を建設した（写真9-2）。氏はこの家で、明治23年4月の新学期から妻（日本人、名は不詳）と娘（アグネス・フローレンス、当時11歳）の3人で生活をはじめた。彼は、すでに48歳になっていた。日本に上陸してからすでに19年の歳月が過ぎていた。彼の妻については、日本人であること以外は現在不明である。この日本人妻は娘の出生年から判断すると、先に述べた破談となった井出すずの公算が高い。もしそうだとすれば、彼のイギリスに残した正妻と離婚できず日本人妻とは内縁関係にあったものと考えられる。しかし、またソウル時代に知り合った別人の可能性も捨て切れない⁽⁴³⁾。

しかし、彼の娘は、後年、明治30年（1897年）、18歳で死亡しているので、この娘の出生年は明治12年（1879年）となり、当時の婚約者との間の子の可能性もある。しかし、娘の名をイギリス名にしたのはなぜであろうか。いまひとつわからないことである。

さて、それはさて置き、彼の勤務ぶりは前記百年史に「二十三、四年度は欠勤

写真9-2 ハリファックスの官舎と復元者故岡部文侯氏



出所) 福島民報, 1988年1月8日朝刊, 福島民報社提供。

皆無という忠実かつ献身的な勤務ぶりであった」と記せられていることから、生徒は皆、彼の指導力に心服し、英語力をつけたものと推定される。明治25年3月24日の第4回卒業式において主席卒業の朝河貫一青年の英語の答辞を聞いた彼は、その文章のみごとさに感じ入り「やがて世界はこの人を知るであろう」と語ったと言われる⁽⁴⁴⁾。おそらく、安積時代の彼にとって、生涯忘れえない感激の一駒であったことであろう。

また、彼に関する残されている公文書の大半は、中学校休暇を利用した東京や県内旅行願いにかかわる文書である。このことから見て、彼が日本の山河、風物に関心を持っていたことがうかがえる。当時の外人の国内旅行は、いちいち日本政府の許可を必要とし、きわめてきびしい制約がなされていた。明治23年4月17日に福島県が彼に与えた「本県雇外国人遊歩免状」には「学術研究ノ為メ雇職休暇ノ節一日間ニ往返シ得ヘキ場所歩行候儀外務省ノ許可ヲ得聞届候事」と記され、旅行に当たっての「外国人遊歩心得」が申し渡された。これには、旅行先の規則遵守すること、他の外国人の同行、他人への遊歩免状貸与の禁止、日本人との売買等の禁止、遊獵免許者でも発砲遊獵の禁止等と記されていた⁽⁴⁵⁾。

(3) 朝河貫一建白書と福島去帰

ハリファックスによる英語教育は、期待にたがわず、多大な成果を上げつつあった3年目の明治25年頃から、福島県議会の外人教師に対する考えが変わってきた。とくに、日本人教師に比べて費用がかかることなどの理由からこれ以上の外人教師の雇用継続は行わないとする議論であった。当時の地方財政状況を見れば、この考えもまったく根拠ないものとも断じ難いが、短見、愚策と言える。とくに、ハリファックスのような優秀な英語教師を評価することができなかったことは、県議会の認識不足である。この事態を憂慮した朝河貫一氏は、ハリファックスの留任を請願した建白書を県議会に送った⁽⁴⁶⁾。

この建白書は1892年(明治25年)11月11日付けで、提出された。彼はこの年の3月に尋常中学を首席で卒業し、5月から8月まで郡山町の金透小学校で英語教授の嘱託をしていた。そして11月には東京専門学校(後の早稲田大学)文学科の編入試験を受けて入学した。建白書はかなりの長文であり全文の紹介は省略するが、まず前文において、中学校における洋人による英語教育について、日本人と洋人の両者から英語を学んだ自らの経験に照らして自説を建白したい旨を述べる。次に、彼は、便宜のため論を分けて「一般に洋人雇入の中学に対する利不利」と「特別に現在洋人の利不利」の2点について述べるものとしている。以下その要点を紹介したい。

第1の「尋常中学校ニ洋人ヲ雇フノ利不利」では、現在の世界の形勢と日本の立場からして、ますます英語教育は奨励されなければならないことは至当の論である。さて、英語教授に洋人が当たることは、利明らかであり、これまでも洋人が当たって来たことを述べ、多額の支出のかかることから日本人雇用を利とする県議会の意見に対して次のように反論する。「……只金銭に比して如何あらんかと御疑問と存候。私の意見にて八百円、二百円の金子ハ、換へ難き利あるやに存候也。其利の深奥に涉りて、英語の経験深き人ならねば見出し難きこと、返す返す残念に存候⁽⁴⁷⁾」と。

まず、日本人の洋人にまさる点として、次の3点を挙げる。

- (1) 日本人の性質のわかりにくいところを、自己の経験から推察して、日本人に適した英語教授法をなしえること。
- (2) 日本語と英語を比較して、その差違をわからせること。

(3) その他、自己の英語を学んだ経験から、教授上同感の情があること。

他方、日本教師が洋人に劣る点として、次の5点を挙げる。

- (1) 英語多数を知らないこと。
- (2) 数を多く知っていても、その穏当な使用法を知らないこと。たとえば、ミルに当たる漢語をみても、普通用いる看、見、視、相の相違を知らなければならぬが、英語でも同様に穏当の使用法を知らなければ、意味通じないのである。
- (3) もっとも必要な前置詞についてあまり知らないこと。
- (4) 会話の不都合はとくにはなはだしいこと。この点については、さらに、俗語を知らないこと、礼儀上の語に暗いこと、略語を知らないこと、調子の違うこと、発音の違うこと、円滑を欠くこと、について細部に指摘している。
- (5) 作文の添削では日本人と洋人とでは、非常な差があること。この違いを知らないで、「……初学の折りに悪き癖を付くるときハ、永久大患をなすものなり。……〔洋人につかないで英語を学ぶことは〕恰も品川・高杉・野村らの諸氏に就いて、松陰先生の品性を学ばんとするが如く……⁽⁴⁸⁾」と辛辣な批判を展開している。

次に洋人の日本人に劣る諸点として、次の3点を挙げる⁽⁴⁹⁾。

- (1) 洋人はどこが理解するのに苦しむかを知らないで、どこも平等に教えること。
- (2) 日本語と英語とを比較することが難しいので、両語の差違を明らかに悟らせることに難しいこと。
- (3) 洋人は通常、学生の中で勤勉者を愛し、怠惰者を嫌い、正直者を賞し、狡猾者を怒る情が日本人よりも強いこと。

このように洋人は日本人に劣る点があるが、日本に長く住み、日本語を知る洋人は、問題なく、かえって利益であると述べる。

以上のような洋人と日本人の優劣の比較考察に基づいて、洋人の日本人に勝る点を次に挙げる。

- (1) 本国の語なので、語数を多く知っているのは明らかであること。
- (2) 穏当な語の使用法に明らかであること。
- (3) 日本人の最も必要かつ困難な前置詞の用法に間違いがないこと。

- (4) 会話に俗語、礼儀上の斟酌^{ウツ}、略語を知っていること。
- (5) 朗読会話の発音がよいこと。
- (6) 拍子のほどよきこと。
- (7) 作文については前述のような日本人の愚かさは起こさないこと。

最後に彼はなによりも最も必要なこととしてコモンセンスについて以下のように述べる。

多少長くなるが、彼がハリファックスの英語授業を通じて会得した成果であり、少なからず後年の国際人朝河貫一博士の活躍を支えた1つの糧として、以下、全文紹介したい（一部、新漢字、平仮名書きに変更）

「ここに何よりも最も必要なことにして、すべての事に関する一大利益あり。欧人に接し居れば、白哲人種の「コモンセンス」を知るを得。洋人の文章に関する大相違は（日本文との大違を言ふ）、この「コモンセンス」を解すれば、不思議のことにあらず。洋人の会話・礼儀・習慣の日本と大相違あるも、この「コモンセンス」を解すれば、怪しむに足らず。「コモンセンス」を悟らねばこそ、笑うべき比喩を書き、洒落を用ゐ、調子が違ひ、発音が間抜け、会話に失敗し礼儀を誤まるに至る。「コモンセンス」は適当なる訳語無之、「風」（フウ）と申して可ならんか。即ち洋風洋人的空気とでも申さんか。之にしても不完全なる言い様に御座候。日本にハ日本の、支那にハ支那の「コモンセンス」あり。之を知らぬときハ、恰かも雲の陰なる月の美を想像するが如く、到底其真相を知る能はず、之を知るときハ、単に会話に作文に、其他英語学に便利なるのみならず、洋人との交際の上にも便利あり。又欧州の文明の真味をも無言の中に悟り得るの便あり。日本の「コモンセンス」は日本の社会風を作り、洋人の「コモンセンス」は欧州全体及個人の行為と社会を作る。「コモンセンス」のことたる鏡花水月の如く、孟子の所謂浩然の気の如く、其趣、其妙言はんと欲して言ふべからず、画かんと欲して画くべからず。思想界の才力卓越なる人が、其万一の状を想像せられんことを希ふのみ。到底筆墨丹青以外の怪物に御座候。今日本人について、洋人の「コモンセンス」を想像せんことハ、雲の月を攫まんとするよりも、困難なることに御座候也[㊦]」と。この時、朝河青年は21歳であり、驚くべきほどの国際センスの持ち主であり、ハリファックスが驚嘆したのも故なしとしない。

さて、いよいよ彼の建白書はハリファックスの継続雇用の論拠を論ずるのであ

る。この点も彼の目をとおして、ハリファックスをどう見ていたか。また、そのことは、ハリファックスの実像にせまるためにも、以下、全文を紹介したい。

「現時の洋人トーマス・エドワード・ハリファックス氏を継続するの利は、他の洋人を新たに傭ふの利よりも多きことは、左の条々に御座候。

- (1) 日本に在りて日本学生を教授し、日本語に関する経験多きこと。日本ニ29年モ居レリ⁽⁵¹⁾。
- (2) 印度・米国、朝鮮・支那等を歴住したる為、経験上自然得る所あること⁽⁵²⁾。
- (3) 人となり公平且つ親切にして、教授の丁寧綿密なること。
- (4) 宗教に無頓着なるを以て、学生を耶蘇教に導くの弊あらざること。
- (5) 学力は尋常中学英語教師として遥かに余りあること。
- (6) 正直勤勉にして曲りなく、且つ職務を守り時を守るの确实なること。
- (7) 英人なるを以て、米人よりハ英語教授に幾分か宜しきこと。
- (8) 英人にてても田舎生まれのものハ、日本の田舎の如く発音あしけれども、同氏はロンドン近隣の出産にて、此の弊あらざること。
- (9) 同氏と生徒間に、互いに気質を知り合ひたるを以て、突然他人と代ふるよりハ便あるべきこと。

尤も現時の俸給を以て、同氏よりも適当なる洋人を傭ひ得ば格別、左もなくば先づまづ同氏が適任と相認め候⁽⁵³⁾」。

この文章からも明らかなように、朝河青年のハリファックスへの敬愛の情がいかに深奥なものであったかがわかる。また、ハリファックスが類い稀な指導力と高潔な人格をもった教師であったかが推察できるのである。

朝河の建白書の提出にもかかわらず、ハリファックスの契約更新は絶たれ、1893年（明治26年）3月末を以て中学校を退職することになってしまった。同年1月頃、彼は病気をしたらしく診断のため東京への往復旅行を願い出ているが、その折り、次の生活設計を立てるべく知人や関係機関に連絡をとっていたものと推定される。このようにして、氏は3年間の福島県尋常中学校英語教師の生活を終わり、郡山の地を去るのである。

ハリファックスが中学校を去った後の英語教育の中心的指導を果たしたのは、前年の1892年、教頭として迎えられ、後の1896年から1900年までの第7代校長の任にあった山崎新太郎教頭（1861～1935年）であろう⁽⁵⁴⁾。氏について、松野良寅氏

は次のように氏の略歴を紹介している。「山崎は旧藩士〔米沢〕協立米沢中学校（藩校興譲館の後身・私立）を卒業後、慶應義塾に進み、成績拔群のため3年の課程を2年7カ月で修了し、その後米沢中学で英語教師として教鞭を執り、1886年、アメリカのオハイオ大学に留学、1890年マスター・オブ・アーツの学位を受けて帰国後、高等師範学校教授、女子師範学校教授嘱託兼任を経て1892年、代吉〔小西重直－京都帝国大学総長（1933年3月～6月）の幼名〕在学中の福島尋常中学の教頭に迎えられた」と述べている⁽⁵⁵⁾。

彼の住んでいた住宅は、その後、歴代校長の住居として使用されていたが、1977年（昭和52年）、危険建造物として取り壊しが決まったが、当時のPTA会長であり、同窓会会長であった故岡部文侯氏は私財を投じて、前掲写真9-2のように自分の山林に移築復元した⁽⁵⁶⁾。現在、この家屋は父の遺志を継いで岡部隆男氏によってハリファックス記念館として甦ろうとしている。

第6節 再び朝鮮海峡を渡海

（1）旧韓末官立英語学校教官

長野県尋常中学校での英語教師を1895年（明治28年）3月末で終わったハリファックスはソウルの官立英語学校の教師として、再び、朝鮮を訪れることになる。この事実を筆者が確認するためには、かなりの紆余曲折を経なければならなかった。それは、故岡部文侯氏が『安中安高百年史』に書き残された「安積百年の歴史の中から」と題する以下の文章を長らく見落としていたことによる。

そこには次のように記載されている。すなわち、「前略 明治28年6月10日発行の「同窓会報告書」によれば、「ハリファックス先生、今般長野県尋常中学校を辞任、朝鮮京城に赴任せらるることとなれるよしに、去る4月8日会員紫樓氏（注、山田四郎先生か？）に寄せたる書状中に佐の数句あり、（左記の句挿入）

聞く京城釜山間の電信線、先生嘗て同国にありしときの設計にかかるものなりと。今や、京城に入るこれを第二の故国と踏むの感あるべし⁽⁵⁷⁾」。

この文章を見つける以前には、前論文において指摘したように、氏は福島県尋常中学校退職後、朝鮮に渡海したものと判断した。それは、尹健次^{ゆん}氏の前掲書の中で、ハリファックスの名前が1894年（明治27年）2月の官立英語学校教官の設

立時の教官名に記載されていたことによったものであった⁽⁵⁸⁾。また、李教授⁽⁵⁹⁾、H. N. アレン⁽⁶⁰⁾も同年同月にハリファックスの名を記載している。しかし、現段階では、上述したように氏が1895年3月末まで、長野県尋常中学校に奉職していたことは明白である。ただ、1894年2月にソウルに短期間滞在していた可能性も皆無ではなく、その点については今後の課題である。

さて、尹健次^{かん けんじ}氏の前掲書によれば、1894年（明治27年）2月、朝鮮では、かつて氏が1年余り教鞭をとった同文学英語学校やその後できた育英公院が発展的に解消し、官立英語学校がソウルに設置された。これは、1891年（明治24年）7月の日語学校（ソウル）に続く官立外国語学校の設置であった。以後、年を追って、日語学校（仁川、1895年）、仏語学校（ソウル、1895年）、露語学校（ソウル、1896年）、漢語学校（ソウル、1897年）、独語学校（ソウル、1898年）、日語学校（平壤、1907年）と続くのである。氏はこれまでの教歴をかわれ、上記官立英語学校の教官に任命された。この時、氏以外の外国人として、W. du F. ハチソンと G. R. ファンプトンが任命された。また、同時に4人の朝鮮人教官も任命されている（表9-5）。修業年限は5年であった。氏はおそらくこの英語学校の中心的教官として活躍したものと思われる⁽⁶¹⁾。

（2）ハリファックスの晩年

ハリファックスにとって、第2回目の在韓は、第1回目の時代に比べて、朝鮮の教育制度も近代化を進めつつあった時代であるから、彼は英語教育に専心できたものと推測される。しかし、来韓3年目の1897年に一家はたいへんな不幸に襲われた。それは、1人娘、アグネス・フローレンスの死であった。遺体は悲しみのうちに、漢江の楊花大橋（旧称、第二漢江大橋）のたもとのソウル外人墓地に埋葬された。18歳の短い命であった。しかし、先にも触れたように、彼の親子関係でわからないことが起こる。それは、この娘の誕生年、すなわち、18年前の1879年（明治12年）は、日本女性と婚約話が持ち上がった時であるから、話は複雑になる。この女性とは明治15年に婚約解消がなされているから、この女性との間に生まれた子供とも考えられる。娘の死亡年齢は死亡届によって確認できるが、D. N. クラークも同年と記録している⁽⁶²⁾。

官立英語学校は、1903年（明治36年）、開学して9年目にして、はじめて第1回

表9-5 官立外国語学校の推移

学校名	設置年代	外国人教官名	朝鮮人教官名	修業年限	第1回卒業年度	卒業生総数 (1910年まで)
日語学校	ソウル	1891年7月 (明治24)	岡倉由三郎 長島崋次郎 長山乙介 田中玄黄	3年	1898年1月*	190名
					1909年5月**	71
	仁川	1895年6月 (明治28)	岩崎厚太郎		1901年6月	63
	平壤	1907年3月 (明治40)	眞藤義雄 太西裕八 樽木末寅		1908年5月	25
英語学校	1894年2月 (明治27)	T.E. Hallifax W. du F. Hutchison G. R. Frampton	安鳴護 尹泰憲 金佑行 鄭一範	5年	1903年2月	79
仏語学校	1895年10月 (明治28)	E. Martel	李能和 安于商 金漢箕	5年	1906年1月	26
露語学校	1896年5月 (明治29)	N. Birukov	韓龜鎬 郭光義	5年	—	—
漢語学校	1897年5月 (明治30)	胡文韋 杜房域	吳圭信 柳光烈 季命七 崔永年	3年	1901年7月	59
独語学校	1898年9月 (明治31)	B. Bolljian	秦秀 崔泰鄧 柳琬	5年	1908年5月	5

注) 尹教授は資料としてつぎのように記している。

すなわち李光麟。前掲『韓国開化史研究』124頁の表を基礎にして、『旧韓末古文書解題目録』(韓国図書館協会, 1970年)の雇傭契約書, および『官報』などを参照して作成。なお, 露語学校は, 日露戦争の勃発によってロシア人が退去し, 結局卒業生を出すことができなかった。*印は本科, **印は速成科を示す(速成科の修業年限は1年)。

出所) 尹健次『朝鮮近代教育の理想と運動』東京大学出版会, 1982年, 159頁。

卒業生を世に送ることができた。修業年限5年であるから, 教師も学生も英語のマスターに悪戦苦闘していたと想像される。この年の5月9日, 氏は改めて, 朝鮮内蔵院との間で3カ年間の英語教師の契約を行った。月給は金275元であった⁽⁶³⁾。そして, この契約期間を終わった年の翌年の1907年(明治40年), これまでの各国語学校は統合され, 官立漢城外国語学校として発足する。氏がこの新制度の学校に留まったかどうかは不明であるが, 翌年の1908年(明治41年), 波瀾に満ちた人生の幕は下がり, 娘とともにソウル外人墓地に永眠した。享年66歳であった。墓

写真9-3 ソウル外人墓地に眠るハリファックス——父(向って右)と娘



出所) 宋熹永氏(建国大学校副学長)撮影

石は写真9-3のように父(右)と娘(左)が寄り添って建てられているが、かなり破損していることも今回、明らかになった。彼の死の2年後の1910年(明治43年)には日韓併合条約が調印され、さらに、その翌年には朝鮮総督府によって官立漢城外国語学校は廃止され、時代は大きく変わろうとしていた。

第7節 結 び

これまで見てきたように、ハリファックスの生涯は、1843年、ウィルトシャー・ウェストバリーに始まり、ロンドンでの学生時代、そしてキューバ島を経て、1871年(明治4年)日本に上陸し、東京生活の後、韓国に渡り、再び日本に戻り、福島県郡山と長野県松本での中学校英語教師を経て、再度、韓国に渡り、官立英語学校教官として、ソウルの地において、1908年、66歳の一生を終わるのである。周知のように、明治政府の国家政策によって、多数のお雇い外人が来日し、それぞれの分野での偉業をなし遂げ、近代日本の礎となったことは、よく知られていることである。これらの人々は、それぞれの一生を調べれば、今回のハリファックスの生涯におとらない波瀾万丈の自分史を刻みつけたことであろう。もちろん、1人の外国人が明治日本の国際化に果たした役割は、全体史の中

では、僅少なものである。しかし、彼は、真の国際人朝河貫一博士に代表されるように、多くの日韓両国青年の人格形成に強い影響を与えた。翻って、彼が福島県尋常中学校の教壇に立った1890年（明治23年）からすでに100年の歳月が流れても、現在、なお、限られた人々とは言え、彼の終焉の地を探し求めているのである。これは驚くべきことである。国際化を考える貴重な事例である。

私も今回のハリファックスの生涯を探索する過程で、心に残る多くのことを学んだ。未だ十分に整理されていないが、最後に記しておきたい。

(1) 現在、日本各地において、国際化の視点からまちづくりが進められている。この際、多くの試みは、人々の交流や情報の交換を中心としている。そしてまた、教育の国際化も着実に進展している。しかし、ハリファックスの例でもわかるように、けっして、これらの試みはあたらしいものではない。明治開国以来の歴史をもつものである。ただ、当時とくらべれば、その範囲は一般市民層にいたる広がりをもっているし、さまざまな国々からの来日外国人が在日するようになってきた。まさに、ハリファックスの時代には想像することもできなかったことである。しかし、時に、先人が汗して残した国際化のルーツを掘り起こし、それらを基盤として、現在の環境を豊かに育成することが肝要であろう。

(2) 私は、今回の調査を通じて、ハリファックス時代の韓国開化の状況と日本が朝鮮半島に深くかかわって行く過程をあらためて知ることができた。そして、韓国開化においても、多くのお雇い外国人がおおきな役割を果たした。恐らく、ハリファックスのように日韓両国のお雇い外国人として仕事をした外国人も少なくなかったであろう。ひるがえって、今日、新たな日韓交流時代を迎えているが、われわれは改めて、過去の不幸な両国の歴史を乗り越えて21世紀へ平和的連携を構築すべきであろう。この意味からも、日韓両国の教育と電信事業に大きな功績を残したハリファックスの生涯は十分に評価されてよい。

(3) 今日は情報化社会と言われるように、あらゆる情報が氾濫している感があるが、特定テーマにかかわる必要な情報はたいへん少なく、多くの努力をしなければ得られないことを知らされた。今回のような人物の一生を探索するには、限られた点としての情報をつなぎあわせて一本の線にしなければならない。しかし、これらの情報は、先行的事実順に得られる保証はなく、むしろ、得られ行く順序はランダムである。このことはとくに、目的達成前に断念した場合、その断

念時以降に得られるであろうあらゆる有力情報を得る可能性を消滅させてしまうことになる。したがって、このような探索行為はまったく不可能なことが明確にならない限り目的達成まで継続すべき行為である。そのためには不断の努力が求められる。しかし、それだけに目的達成の瞬間の喜びは大きいものである。とくに、この点をこれからの若い研究者に知ってほしい。

(4) 通例、このような探索の過程では、それぞれの時点で、明確なことと不明確なことが明らかになる。不明確なことについては、いろいろな仮説を設定して明確化する努力を試みることになる。しかし、ここで、留意すべきことは、明確にみえる情報についても、一度は疑問をなげかける必要があることである。今回の例では、1871年に来日の電信技師と1876年からの英語教師とは長い間、別人と判断していたが、結果的には最初に同一人ではないかと疑問を投げかけるべきであった。仮説は明確に棄却されるまで、持ち続けることが大切である。

(5) 特殊テーマの探索は、目的達成までにいくども壁に突き当たることが通例であろう。その際、その特殊テーマをより広い一般的テーマに還元することによって、目的達成に近づくことができることも忘れてはならないことであろう。今回の例では、ハリファックス探索が特殊テーマとすれば、お雇い外国人問題はより広い一般的テーマとなろう。また、今回のように、1893年4月以降の彼の足跡を探索することが直接の目的であったが、この場合も、福島県以前の足取りを探索するなかから、おおくのヒントを得ることができた。調査は一見、回り道のように見えても、初めに、できるかぎり、調査対象を広げ、次第にその調査圏を絞り込むことが鉄則なのかもしれない。

(6) このようなテーマの探索では、できるかぎり、いろいろな人々に話し、話題化することがのぞましい。恐らく、今回の目的達成の大部分は、さまざまな人々から与えられた情報やヒントによっている。今回、初めて知り合った方々も多く、この点では、これまで支援してくれた方々に深謝するところである。以上、多少、蛇足的なことも記したが、参考にしていただければ幸いである。

なお、最後に彼の生涯を略年表(表9-6)で示す。

表 9 - 6 トーマス・エドワード・ニュー・ハリファックスの生涯

年次	年号		年齢	事 項
	日本	韓国		
1843			1	5月10日, Westbury, Wiltshire で, 父 Thomas Edward Hallifax, 母 Emily Hallifax Morgan の間に誕生。父親はスクールマスター (出生届)
1848			6	ハリファックス一家, Westbury から移転, 移転先不詳 (Westbury 市役所)
1850			8	St. Marry's College, London Hammersmith 区, Brook Green に創立 (1925年, 現在地 Twickenham, Strawberry Hill に移転) (Hammersmith 区資料館)
1851			9	同校付属小学校入学 (または前年) 父親同校教員 (長野県提出英文履歴書, 福島県提出邦訳履歴書)
1857			15	Eton College に入学 (長野県提出英文履歴書, 福島県提出邦訳履歴書)
1859			17	電信サービス会社に入社 (長野県提出英文履歴書)
1862			20	9月13日, Salford で Amie Maria Blakeley (20歳, 父親はポーター) と結婚 (結婚届)
1870	明 3	李 7	28	キューバ島において英国電信ケーブル会社の業務に従事 (長野県提出英文履歴書)
1871	4	8	29	5月16日から電信寮に雇傭され (3カ年), 東京-豊橋間等の工事に従事 (通信協会博物館資料)
1874	7	11	32	7月2日満期雇止。英国に帰国, 同年, 再び来日
1875	8	12	33	東京で英語教師 (福島県提出邦訳履歴書-詳細不詳)
1876	9	13	34	12月, 成立学舎 (東京, 丸山光成経営) で英語教師 (18カ月) (太政類典)
1878	11	15	36	共貫義塾で英語教師 (3カ年) (福島県提出邦訳履歴書-詳細不詳)
1879	12	16	37	カルフォルニアに18カ月旅行 (長野県提出英文履歴書-年次等不詳)。娘 Agnes Florence Hallifax 誕生 (月日不詳, 母-井出すず?) (死亡届)。12月, 日本女性 (井出すず) から結婚願提出 (東京都公文書館資料)
1880	13	17	38	1月, 英国領事より結婚願について困難の件有りと返書 (同上)

1881	14	18	39	6月, 攻玉社(芝新銭座近藤塾)で英語教師(攻玉社資料)
1882	15	19	40	6月, 井出側から結婚願取下願い提出(東京都公文書館資料)
1883	16	20	41	攻玉社退職, 8月朝鮮へ渡海, 10月朝鮮政府通商衙門付属英語学校(同文学)英語教師に就任(長野県提出英文履歴書)
1885	18	22	43	英語教師断念(政府の米国伝道師の新雇傭による)(同上)
1886	19	23	44	8月, 英語教師を解かれ, 11月政府に電信工事監督として雇傭, 京城-釜山の工事に従事(同上)
1888	21	25	46	7月, 京城-釜山間の電信完成, 功により通政太夫の称号を授与(同上)
1889	22	26	47	朝鮮電信英語学校英語教師(同上)。The North China Branch of the Royal Asiatic Societyの会員(入会時住所はソウル)。当会機関誌, <i>Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society</i> , Vol. 24, 1889-1890, pp. 307-308に「日本における男女の顕著な長寿について」の1文寄稿
1890	23	27	48	4月, 福島県尋常中学校(現福島県立安積高校)英語教師(福島県歴史資料館資料)。家族, 日本人妻-不詳, 娘の3人(安中安高百年史)
1893	26	30	51	3月, 同中学校退職。5月10日長野県尋常中学(現長野県立深志高校)英語教師(長野県教育委員会資料)
1894	27	31	52	2月, 朝鮮国官立英語学校開学, 英語教師として記載
1895	28	32	53	3月31日, 長野県尋常中学退職。朝鮮国官立英語学校英語教師に着任
1897	30	光元	55	9月6日, 娘 A. F. Hallifax 死亡, 18歳(死亡届), ソウル外人墓地に埋葬
1899	32	3	57	この頃, 上記の Royal Asiatic Society を退会
1903	36	7	61	5月9日, 3カ年の英語教師契約更新(月額275元, 内蔵院)(李鉉淙論文)
1906	39	10	64	上記契約完了, 年金生活開始か(2年後の死亡届)
1907	40	純元 隆元	65	各国語学校の統合により官立漢城外国語学校発足
1908	41	2	66	11月24日, 死亡。ソウル外人墓地に埋葬(死亡届)

1909	42	3	8月22日, 韓日合邦条約 (韓国併合に関する日韓国条約) 調印
1911	44		11月1日, 朝鮮総督府により官立漢城外国語学校廃校

注) 韓国年号は次の通りである。李: 李太王, 光: 光武, 純: 純宗, 隆: 隆熙

〈注〉

- (1) 本章は金田昌司「地域国際化とお雇い外国人—T. E. N. ハリファックスの研究—」『経済学論纂』1992年2月, 137～165頁を新事実によって訂正・要約した。
- (2) 福島民報, 1988年1月8日朝刊。
- (3) 岡部文侯「安積百年の歴史の中から」安積高等学校百年史編纂委員会『安中安高百年史』1984年, 1302～1303頁。
- (4) ロンドン, ジェネラル・レジスター・オフィス保管の彼の出生・死亡記録書による。
- (5) 1980年の福島県尋常中学校赴任時には, 彼の家族は, 日本人妻と娘の3人であり (上掲書, 注(3)181頁), 中学校校庭内に彼らのために新築された家屋で生活していた。この家屋は故岡部文侯氏によって修復され, 移転現存している。(注(2)写真9-1)
- (6) 福島県歴史資料館資料。
- (7) 長野県教育委員会資料。
- (8) 上掲論文 (注(1)), 141～142頁。
- (9) 高橋善七『お雇い外国人7通信』鹿島研究所出版会, 1969年, 35頁。
- (10) 同上, 39頁。
- (11) ユネスコ東アジアセンター編 (以下, ユネスコと省略)『資料御雇外国人』小学館, 1975年, 345頁には, 2人のハリファックスが別人として記載されているが, 同一人物であり, 通信総合博物館資料によって確認できた。
- (12) 上掲書 (注(8)), 55頁。
- (13) 上掲書 (注(11)), 354頁。原資料は外務省記録「私雇入表」(自明治9年7月)。
- (14) 東京都公文書館資料, 府下居住各国人明細書による。
- (15) 上掲書 (注(11)), 354頁。
- (16) 攻玉社沿革史目録1881(明治14)年6月7日には「英国人ランベルト解傭, 英国人ハルハックス採用ス」とある (攻玉社理事 天ヶ瀬恭三氏のご示唆による)。
- (17) 攻玉社学園編『攻玉社120年史』1983年, 2～12頁。攻玉社学園編『攻玉社90年史』(未見)。
- (18) 同書 (90年史), 49頁。

- (19) 同書(120年史), 35頁。
- (20) 同書(120年史), 41頁。
- (21) 東京都公文書館資料。
- (22) 上掲書(表9-2 出所), 196頁。
- (23) 井出すずの後見人である井出勢以(せい)は1882(明治15)年, 小石川区小石川表町45番地に居住していたが, 当時の戸籍はすでに廃棄処分となっており, 血縁者の有無については確認できない。
- (24) ハリファックス, 松本重成訳「朝鮮の事情」福島県尋常中学校校友会編『扶桑の花』第2号, 1890年5月, 35頁。
- (25) 李光麟『改正版 韓国開化史研究(第2輯)』一潮閣(ソウル), 1982年, 170頁。
尹健次『朝鮮近代教育の理想と運動』東京大学出版会, 1982年, 61頁。
- (26) H.N.アレン, 桜井義之訳『朝鮮近代外交史年表』国書刊行会, 1987年, 37頁。
- (27) 上掲書(注(25)『朝鮮近代教育の理想と運動』), 61頁。
- (28) 上掲(注(24)), 35頁。
- (29) 上掲書(注(25)『改正版 韓国開化史研究(第2輯)』), 108頁。
- (30) 育英公院の開校日については, 8月26日(「新東亜」編輯室編『朝鮮近代史年表』三一書房, 1980年, 27頁), 9月23日(李光麟, 上掲書, 110頁), 9月26日(尹健次, 上掲書, 110頁)と異なる。育英公院については, 李光麟, 上掲書, 103頁以下, 尹健次, 上掲書, 69頁以下。
- (31) 上掲(注(24)), 35頁。
- (32) G. W. Gilmore, *Korea From Its Capital, Philadelphia*, 1892, p.233.
- (33) 朝鮮総督府通信局『朝鮮通信事業沿革小史究』1914年, 4頁。
- (34) 上掲(注(24)), 36頁。
- (35) 上掲書(注(33)), 6頁。
- (36) *Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society*, Vol.24, 1989-1990, pp.73-74.
- (37) *Ibid.*, pp.307-308.
- (38) 上掲書(注(3)『安中安高百年史』)177頁。
- (39) 上掲資料(注(6))。
- (40) 上掲資料(注(6))。
- (41) 村川友彦「明治福島お雇い外国人—英語教師ハリファックス氏—」(財)福島県文化センター歴史資料課『福島文化』1983年12月, 12頁。
- (42) 上掲書(注(38)), 180~181頁。
- (43) 官報, 第98号, 1886年10月6日によると, 彼の在韓時代に当たる明治19年8月の

京城居留日本人の数は131人で、うち男94人、女37人おり、さらに、仁川での居留日本人の営業者は289人（男女不詳）、釜山港居留日本人の数は1,807人でうち男918人、女889人（同年7月）であったから、日本女性と知り合う機会もなくはなかったと思われる。

- (44) 阿部善雄『最後の日本人—朝河貫一の生涯—』岩波書店、1983年、8頁。
- (45) 上掲資料（注(6)）。
- (46) 上掲書（注(38)），295～302頁。
- (47) 上掲書（注(44)），297頁。
- (48) 同上，298頁。
- (49) 同上，299頁。
- (50) 同上，299～300頁。
- (51) 19年の誤りか。
- (52) 上掲資料（注(7)）によって、米国サンフランシスコへの旅行は確認できるが、支那、印度はおそらく明治7年の英国への一時帰国の際に立ち寄ったのであろう。
- (53) 上掲書（注(44)），301頁。
- (54) 校長就任年次については上掲書（注(3)『安中安高百年史』1206頁）によったが、下記（注(53)）では、28年となっている。
- (55) 松野良寅『会津の英学』歴史春秋社、1991年、178頁。
- (56) 上掲（注(2)）。
- (57) 上掲書（注(3)），1303頁。
- (58) 尹，上掲書（注(25)），159頁。
- (59) 李，上掲書（注(25)），137頁。
- (60) 上掲書（注(26)），75—76頁。
- (61) 上掲書（注(25)），71頁。
- (62) Donald N. Clark, "Seoul Foueigener' Cemetry, Korea," *An Infoumation History, 1890-1984*, Yongsan Library, 1984, Seoul（未見），李光麟教授のご示唆による。
- (63) 李鉉淙「旧韓末外国人雇考」〈Ⅱ〉『韓』（東京韓国研究院）9-1，1980，53頁。

〈付記〉

本調査に当たり、多くの方々および諸機関の御協力を頂きましたことに御礼申し上げます。下記に記して謝する次第です（敬称略，1989年現在）。

打越島三（亜南産業株式会社社長），畠岡部文侯（元安積高校扶桑会会長，元郡山経済専門学校校長，1988年没），岡部隆男（郡山経済専門学校校長），小平千文（長野県教育委員会専門主事），相楽幸助（中央大学文学部教授），佐藤元英（外務省外交資料

館編集員), 菅野芳彦 (中央大学文学部教授), 宋熹永 (建国大学副教授), 永嶋道広 (通信協会博物館部), 三上昭美 (中央大学文学部教授), 南相吉 (株式会社三養社東京支店長), 宮崎昭威 (中央大学経済学部教授), 村川友彦 (福島県歴史資料館研究員), 吉田弥 (元安積高校校長, 1990年退職), 尹健次 (神奈川大学教授), 李光麟 (世宗大学教授), ラインハルト・デリフテ (英国ニューキャッスル・アボン・タイン大学教授), 松谷泰樹 (㈱マーケティングエナジー), 英国ハマアスミス資料館, 英国セント・メアリーズ・カレッジ公文書館, 英国ウィルトシャー・ウェストバリー市庁, 郡山市立図書館, 中央大学中央図書館, 東京都公文書館, 東京ブリテッシュ・カウンスル, 東京韓国文化院図書館, 通信協会博物館, 福島県立図書館, 外務省外交資料館, 福島県歴史資料館